

花ちゃん・オー君・モンタ博士のわくわくドキドキ国立てくてく

国立第七小学校 平成25年6月10日 NO.20



ガクアジサイ

Hydrangea macrophylla

f. normalis by k.morita

オー君 「あ！これは、学校のうら庭にさいている花だ。ガクアジサイというんだ。」

花ちゃん 「うわー！オー君。よく知ってるわね。私もガクアジサイ大好き。」

モンタ博士「モンタ博士も大好きだ。でも、このごろ梅雨入りしたといっても、なかなか雨がふらないね。雨にぬれてさくのもステキなんだけどな・・・。」

花ちゃん 「ところで、モンタ博士！どうしてアジサイという名前がついたのですか。」

モンタ博士「いい質問だね。アジサイはむかしは「アズサイ」とよばれていたんだよ。」

オー君 「アズサイって、なんですか、そりゃ。」

モンタ博士「アズとは集まるということ。サとは真と書いてほんとうということ。イとは藍（あい）と書いて青いということ。ようするに、『集まりさく真のあい色』ということなのさ。」

花ちゃん 「モンタ博士、アジサイのほかのよびかたは何かあるのですか。」

モンタ博士「よく聞いてくれたね。アジサイはさき始めから終るまでの間、花の色が変わっていくので七変花（しちへんげ）ともいうのさ。」

オー君 「ねえ、ちょっと待って、アジサイって、右の写真のようなものがアジサイなんでしょ。ガクアジサイとはちがうんだ！」



モンタ博士「その通りだ。ガクアジサイは原種（げんしゅ）なんだ。原種というのは、いろいろな種類のアジサイを改良（かいりょう）して栽培するもととなるものなんだ。改良・栽培（さいばい）したものは、栽培種とか品種（ひんしゅ）とかいうのさ。」

花ちゃん 「ガクアジサイは、もともと日本にあったアジサイということなんですね。」

モンタ博士「そうだね。ふつうよく植えられている玉のようなアジサイを品種名でセイヨウアジサイと呼んだり、学名そのままにハイドランジャーとかいうのさ。」

オー君 「うーん。原種とか品種とか、学名とか・・・おいらわかなんなくなっちゃったよ。」

モンタ博士「ほかに変種（へんしゅ）と亜種（あしゅ）とかもあるけど、ちょっとむずかしいお話になってごめん。そのうち、やさしく説明してあげるよ。」

花ちゃん 「ところで、栽培されているものではなくて、山にはどんなアジサイがあるの。」

モンタ博士「そうだね。おととい、モンタ博士がおうちの近くの雑木林に行ったら、コアジサイというアジサイがきれいだったね。山のアジサイには、他にもヤマアジサイ・ツルアジサイ・ガクウツギなどがあるんだ。モンタ博士が一番のお気に入りのアジサイは、タマアジサイだ。山で一番おそく咲くアジサイさ。」

アジサイというお花

アジサイは土壌の性質によって、花の色が変わることが知られています。一般に、酸性の土壌では青色はいつそう冴えて美しくなります。これは、土の中のアルミニウムや鉄が酸に溶解して吸収されるからです。すなわち、鉄やアルミニウムが可溶性の状態が存在することを示すものと言われています。花の色を決めるのは、アントシアンやアルミニウム、さらに別の有機化合物がお互いに作用し合うのではないかと考えられています。しかし、薬品で極端に土壌の酸度を変えると、枯れる原因にもなります。日本の土壌は酸性ですから、一般に青色のものが多く見られます。しかし、ベニガクというアジサイは酸性土壌でも美しい赤になります。それは、品種の特徴です。

日本のアジサイを世界に紹介したのは、日本の西洋医学の目を開かせたシーボルトと言う人です。彼は日本植物誌という本の中に、自分の愛した日本人女性「お滝さん」の名を学名に入れて、「ハイドランジア・オタクサ」と発表しました。オタクサというのは、今やアジサイの世界共通語となっています。

ほのあけの 光さむき 岩の間の タマアジサイは 皆薔なり （鹿兒島寿蔵：人形作家・歌人・人間国宝）